

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2025/9/29							
団体名	NPO法人 BOON	活動タイトル	練馬区拠点「子どもが羽ばたく前に屈める」居場所プロジェクト							
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景							
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	本法人は、「全ての人が、自立して生活するなかで自己実現をしつつ、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会」の実現をめざす。 特に”子どもの教育・福祉”において、「すべての子どもが、居場所をもち、他者に頼りながらも自立して生活するとともに、共生社会の実現に向けて他者と協働しながら、新たな価値を創造する人材に育つこと」ができる社会の実現をめざしている。 具体的には、子どもが、①悩みや課題にかかわらず、安全・安心に過ごし、②生きる意欲をもって自分のために努力する個として育ち、③共生社会の形成に参画しようとし、④社会問題を解決するために、他者と協働し新たな価値を創造する人材に育つことができる社会を本法人は実現したい。		活動風景①  参加した子どもは、一緒にゲームをしたり、話したり、思い思いの活動をしてゆっくりと過ごします。							
	本法人の設立目的は、一言で言えば「青少年を社会に貢献する人材として育てる」ことである。具体的には、青少年を＜羽ばたく個＞：「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら、新たな価値を創造する人材」に育てることである。係る本法人の社会的役割は、子どもの自立支援と社会に貢献する人材の育成、及び子どもを育てる人材（保護者、教師、保育士等）の支援等である。 そのために、“子どもの自立支援”において、①安全・安心に自分のペースで過ごせる居場所の提供、②信頼できる伴走者の提供、③居場所と伴走者の提供により、「ありのままの自分」を肯定し「他者や社会の役に立てる」と感じる子どもへ育てること、④＜羽ばたく個＞に必要な能力を身につけられるような、自らの可能性に挑戦できる活動や機会の提供、⑤誰もがまた戻って来られるよう居場所を継続することを掲げる。									
	●望ましい人的資源：本法人の活動に参加している多様な人材が、「子どもの社会貢献力を育てる活動」に繋がり、活躍している。加えて、事業の拡大に合わせたボランティア登録者が常に確保されている。 ●望ましい物的資源：事業で活用する空間、食材、また物品等について、地域の理解ある個人や協賛企業からの寄付等でまかなうことができるネットワークが構築されている。 ●望ましい活動資金：本法人の裁量・工夫の余地の大きい自主財源（会費・寄付・自主事業）を十分に確保し、居場所事業の事業目標に対し効果の高い投資を行える財政力を保持している。 ●望ましい情報：団体職員やボランティアを含む多様な人材とそのネットワークから常に最新情報を得ている。かつ、その情報を参加者（特に子ども）のために利活用できる仕組みを持っている。									
●団体の活動基盤										
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)								
子どもが安全・安心に過ごし休息のできる安全基地と感じられるな「子どもの居場所」を毎週土曜日13時から17時にかけて実施した。また、居場所の中で下記のような取組を行った。 ①子どもが、自分たちのペースで取り組める卓球などのスポーツやゲームを通して、ゆっくり時間を過ごせるよう、ボランティアスタッフを配置した。 子どもは、ボランティアスタッフや他の参加者と話し、一緒にゲーム等をする中で、社会や他者と関わる心のエネルギーを高めていった。 ②子どもが、社会に＜羽ばたく個＞として成長するために、ボランティアスタッフや他の参加者と一緒にボランティア活動、自然体験活動、料理教室等の体験活動をできる限り自分たちで計画し実施していった。 ③子どもへの対応力を組織として高めるために、責任者での事例検討会とボランティアスタッフに対して研修を行った。アドバイザーとして心理士を招いて居場所の運営や子ども対応について省察し、スタッフの対応力を高め、①②の活動の質を高めることができた。		本活動は、引きこもり、不登校または困りごとを抱える子どもに対し、安心して過ごせる居場所を提供し、体を動かしたり、一緒に遊んだり、話したりしながら、参加者の社会参加意欲、自己肯定感、自己有用感を高めてもらうことを目標としていた。1年間の活動を通して、下記のような成果をあげることができた。 ①子どもの居場所を週1回4時間、計51回実施。子どもの遊び場、体験活動を月1回、計11回実施。 ②悩みや困難を抱え、場合によっては社会に出ていくことに疲れた子どもが、ゆっくりと過ごし、心のエネルギーを高めていく過程で自己肯定感を向上させていくことがわかった。 ③子どもたちが居場所や遊び場で高めたエネルギーを発揮し、他者との交流、社会参加、新しいことへの体験を行ってくれた。 ④子どもがゆっくりと過ごせる空間を維持するために、スタッフが専門家と一緒に事例検討したり、研修を受けて自信を持つことが子どもとスタッフの関係変容につながった。								
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）						
今回の取組を通して、事例検討会や研修を通して、学習支援とは異なった「人に寄り添う」居場所の運営についてスタッフが具体的なノウハウを蓄積できた。具体的には、アサーティブなコミュニケーション、傾聴、子どもに応じた距離で見守ること、これらをスタッフが実践の中で暗黙知として身につけた。また、これ以外にも下記のようなノウハウを得られた。 ①人的資源：学習支援のボランティアが居場所に参加してくれたり、居場所のスタッフが学習支援にも参加したり、法人全体でボランティアの確保、経験の場の増加、フォロー体制の構築に繋がった。特に、フォロー体制では、ボランティア自身も居場所や研修で自身のことや子どもの対応での悩みを相談することができ、継続的なボランティア参加ができている。 ②物的資源：地域の方からのお菓子等の継続的な寄付を受けられるようになった。 ③情報：今回の取組を通して新しいネットワークができ、また、ネットワークの広げ方を法人の職員が学ぶことができた。		本法人は、「全ての人が、自立して生活するなかで自己実現をしつつ、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会」の実現をめざしている。そのために、今回の取組を通じて、下記のような課題と次年度、居場所を継続しながら発展・改善する手段を考えた。 ①エネルギーを高めた子どもたちが、学校での学び、あるいは学校に代わる学びに対する支援を求めている。社会参加意欲、自己有用感を高めるために、居場所と遊び場以外に、学習支援を行っていきたい。 ②体験活動では、企画するだけではなく、大人が行うこと（実際に社会で行うこと）を子どもたちに体験させたい。具体的には、講師や会場の選定等である。1年目は大人が最後には行っていたものも、まずは一緒に子どもたちと行っていけるようにしたい。		<table><tr><td rowspan="2">この1年間の活動を通じて</td><td>子どもたちが安心して過ごせる空間づくりのために、スタッフも学び、子どもと一緒に楽しむ環境を提供することができ、子どもの自己肯定感の感情</td><td rowspan="2">を達成しました。</td></tr><tr><td colspan="2">■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</td></tr></table> 継続的に参加してくれた子どもは、活動中の笑顔、進路や学校または自分と友達の関係についての前向きな話題が増えた。体験活動の企画では、子どもたちが主体的に発言し、他の子を巻き込み、役割を分担していた。また、子どもたち同士でゲームや体験活動の声掛けも主体的に行っていた。コミュニケーションに課題のあった子も、スタッフや周りの子どもを気遣う姿勢が見られるようになった。		この1年間の活動を通じて	子どもたちが安心して過ごせる空間づくりのために、スタッフも学び、子どもと一緒に楽しむ環境を提供することができ、子どもの自己肯定感の感情	を達成しました。	■ 受益者の具体的な変化（自由記入）	
この1年間の活動を通じて	子どもたちが安心して過ごせる空間づくりのために、スタッフも学び、子どもと一緒に楽しむ環境を提供することができ、子どもの自己肯定感の感情	を達成しました。								
	■ 受益者の具体的な変化（自由記入）									